

卷子本『北亜墨利加圖卷』の話

奥 正敬

■はじめに

本学図書館には、江戸時代の後半に漂流してメキシコへ渡った初太郎という船乗りたちの記録で、『北亜墨利加圖卷』と呼ばれている絵巻物があります。また、この巻物と同様の挿し絵が入った『海外異聞』という書物が所蔵されています。どちらも初太郎たちが日本に戻った翌年の天保十五（1844）年の取り調べを基にして作られたものですが、二つの資料の作成に係わった人物は異なっており、それぞれがどのようにして作られたのかを考えたいと思います。

■漂流人初太郎、メキシコから戻る

今から百七十一年前の天保十二（1841）年十月十二日、兵庫の中村屋伊兵衛の持ち船で樽廻船「永住丸⁽¹⁾」は、食料品を積んで上方から奥州へ向かっていましたが、その夜、総州犬吠埼沖で嵐に遭遇して大破しました。

この船の船頭は紀州出身の善助（1817-1874）といい、乗り組んでいた阿波生まれの初太郎（生没年不明）ら総勢十三名が約四カ月にわたって漂流していたところをマニラからメキシコへ戻る途中のイスパニア船エンサーヨ（Ensayo）号に救助されました。そして、彼らの内七名が、当時メキシコ領であったカリフォルニア半島の最南端にあるサンルカスに上陸させられました。その後、一行は行動を別にしますが、善助と初太郎は共にメキシコのサンホセやマサトランを転々とするようになります。

彼らは現地の人々の親切な助けを受けながら、やがて帰国の途に就き、アメリカ船でハワイからマカオに到着し、寧波、杭州、乍浦を経て、天保十四（1843）年十二月に中国船で長崎へ戻りました。また、別の行動をとっていた乗組員の亥之助や太吉、弥市も弘化二（1845）年に帰国しています。

■帰国者に寛大になった鎖国体制

寛永十八（1641）年に完成したとされる鎖国体制では、一旦外国へでた日本人は二度と我が国へ戻ることができず、万一帰国できても死罪は免れなかったようですが、二百年を過ぎた天保年間になると、この体制も大きく変化しています。既に初太郎らが帰国する五十年前の寛政五（1793）年には、漂流してロシアに渡っていた大黒屋光太夫らが、また、三十九年前の文化元（1804）年には津太夫らが、それぞれ交易を求めるロシア使節に伴われて同国船で日本へ戻っており、詳しい取り調べは受けたものの、処罰されることはありませんでした。

初太郎らが帰国した天保十四（1843）年は、イギリスのフェートン号が長崎へ入港して狼藉を働いた年から三十五年を経ており、オランダのウィルレム二世から開国を促す進言がある前年で、ペリー提督来航の十年前にあたります。このように、江戸時代も後半になるとヨーロッパで宗主国の関係に変化が生じたことやアメリカ合衆国の台頭によって、北東アジア海域の制海権も変わり、オランダ以外の国々の船が頻繁に日本近海を航行するようになります。

それに伴って、幕府の対応も次第に軟化し、従来からのオランダ商館長から提出させていた「風説書⁽²⁾」などの情報に加えて、海外帰国者^{ふうせつがき}がもたらす漂流体験談は、鎖国体制を堅持していくための重要な海外情報になっていたのです。また、帰国者の取り調べの内容は一般社会へ伝播し、書き写されて写本になるものや、中には版行されるものもあり、閉ざされた社会では外国の話が人気を呼んだようです。

■漂流の話、『亜墨新話』から『海外異聞』へ

話は戻りますが、長崎へ戻った善助と初太郎は、同地の奉行所の取り調べを受けた後、それぞれ出身の国許へ引き取られます。初太郎は故郷の阿波徳島^{あわのつしま}に戻ると、早々に藩主の蜂須賀齊裕に引見され長崎と同様の取り調べを受けます。

初太郎の体験は、当時の日本人には理解し難いものであったことが逆に高い関心を集めたよ